

シネマ日記



No. 71

○月×日 大震災や原発のドキュメンタリーが相次ぐ。だが、「希望の国」(園子温監督)はフィクションである。だが監督は言う。「想像力で描かずに、自分の目で確かめたもの以外は映画にしないと決め、徹底的に取材した。」というのも、放射能汚染からの避難を余儀なくされている原発周辺の人々を襲っている過酷な現実とは、どんな想像力も及ばない世界に違いない。その点、監督の意図は成功し、極めてリアリティに富んだ「現在進行形」の映画になっている。物語は、草花の咲き乱れる美しいのどかな農村でのこと。突然、警察や役場の人たちが来て、自分の庭を分断して杭を

打ち、立ち入り禁止のロープを張り巡らしたことから始まる。原発事故で20キロ圏内になった隣家は避難所行きを命じられたが、かろうじて「圏外」となった主人公の一家は強制退去を免れる。酪農を営む初老の男(夏八木勲)にとつては自分の老い先は短く、乳牛の世話もある。認知症の妻(大谷直子)も知らない土地で暮らせない。しかし男は、息子と嫁には「ここからすぐにでも逃げる」と説得を試みる。原発に反対してきたこともあり、放射能汚染の恐ろしさをよく知っていたからだ。息子と嫁は避難所に移り、新しい命を宿していることがわかる…。その後、避難区域は拡大され、酪農一家も強制退去を迫られる。男は牛舎に猟銃を持って入り、妻にも銃口を…。父が言ったように「生きるためには逃げるしかない」と、息子と嫁は新たな命のために、さらに遠くの町に脱出すべく車を走らせる。休憩のため車を停めた海辺で、見ず知らずの母親と幼児が笑顔で戯れている。どうやら自分たちも

「希望の国」にたどりつけたのかも。そう思った刹那、カバンの中の放射能計測器が音を立て始めた。この美しい光眩い浜辺でも…。この映画は、福島原発事故から数年後の「長島県」という架空の地での話だ。福島事故後、何も変わらず、新たな事故は明日にも突然起こり、我々の住む町にも見えない放射能が襲いかかるかもしれないことの暗示なのだ。

○月×日 イラン革命下の79年、テヘランで起きた米大使館占拠事件。このときカナダ大使公邸に逃れた6人の人たちがいた。米CIAの救出作戦はハリウッド映画のロケハンに化けさせて、彼らを脱出させようというもの。「アルゴ」(ベン・アフレック監督・主演)は、その決死の救出劇の顛末を描いた。まるでウソのような話だが、97年、18年ぶりに機密解除になり、明るみに出た史実だ。見つければイラン革命防衛隊の手で公開処刑必至。乗客に混じっての民間航空機での脱出劇は、手に汗握るほどスリリングで、娯楽度満点。

○月×日 失業中の男やもめが理由もなく暴力を振るっては周囲に恐れられ、酔いつぶれる日々。自分の愛犬さえ蹴り殺してしまう始末だ。そんな最低の男がふとしたことでチャリテイ・ショップの女と知り合う。明るそうに見えた女だったが、女もまた夫の暴力に怯え、幸せとは対極にいた。二人はいつしか互いに惹かれ合い、心を癒し合う仲になっていく…。人生のたそがれを迎えた中年の男女の切ない思い。「思秋期」(英、パディ・コンシダイン監督)というオシャレた邦題がつけられているのもわかる。が、原題は「テイラノサウル」(肉食恐竜)。社会の底辺で何度も傷つき生きてきた恐竜男にも、薄幸女の愛の魔法が効いたか、優しい気持ちを取り戻す。しみみりとした気分を満たされる。○月×日 「そして友よ、静かに死ね」(オリヴィエ・マルシャル監督)は、ギャングだった男が若き日の友情を貫くために、かつての友を信じ、が、最後になしたことは…。老人たちの寡黙と哀切さ…。(内藤哲